

2013.10.1[火]—11.17[日]

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

ごあいさつ

祈りの画家「ジョルジュ・ルオー展」開催にあわせ、当館の現代美術コレクションから「祈り」や「聖性」に関連する3作家、村上友晴、宮島達男、松尾藤代の作品を選び、「現代美術と祈り」展を開催いたします。

カトリック教徒だったルオーは、キリストの受難や聖書の風景をはじめ、宗教的主題の絵画を数多く描きました。また貧しき人々や道化師など世俗の人々に注ぐまなざしも、キリスト教徒としての倫理観や宗教観に彩られていました。彼は独自の人間観察によって生み出した類型的な人物像のなかに、自らの「祈り」を込めたのです。

20世紀後半、美術の表現手法は一気に多様化していきます。そのなかで現代の作家たちも、ルオーの時代には考えられなかった斬新な方法で、自らの「祈り」を表現してきました。例えばカトリック教徒の村上友晴は、ナイフで絵具をごく少量ずつ丹念に塗り重ねて黒の抽象絵画を制作します。恐ろしく手間のかかるこの単調な作業は、何かを表現することよりも、神に祈る行為に近いと言えます。松尾藤代も、窓から入る光のきらめきを絵画化し、抽象とも具象ともつかない聖なる世界をつくりあげました。宮島達男は、時計や電光表示に使われる青色LEDのデジタルカウンターで、展示室の床に星空を再現します。数字の表示と消滅を繰り返すカウンターは、星の生と死、そして再生を表しますが、そこには東洋思想や仏教思想の影響が見られます。

これら3作家は、現代美術ならではの新しい手法を駆使して、瞑想的で崇高な作品をつくりあげました。3人3様の極めて現代的な「祈り」の表現をぜひ体験してください。

	作家名	作品名	制作年	技法	サイズ(cm)
1	村上 友晴	無題	1980-82年	油彩・カンヴァス	162.0x130.0
2	村上 友晴	無題	1982-83年	油彩・カンヴァス	162.0x130.0
3	村上 友晴	無題	1983-84年	油彩・カンヴァス	162.2x130.0
4	村上 友晴	無題	1986-87年	油彩・カンヴァス	91.0x73.0
5	村上 友晴	十字架の道	1989年	リトグラフ・紙(14点)	各61.0x46.0
6	村上 友晴	時祷集	1990年	ドライポイント・紙(3点)	各82.0x61.0
7	村上 友晴	ピエタ	1992-93年	鉛筆、アクリル・紙(12点)	各42.5x32.0
8	宮島 達男	地の天	1996年	ミクストメディア	直径96.0
9	松尾 藤代	TOTAL LOSS ROOM	1997年	油彩、カンヴァス	195.5x174.2
10	松尾 藤代	TOTAL LOSS ROOM	1999年	油彩、綿布・パネル	161.5x200.0
11	松尾 藤代	TOTAL LOSS ROOM	2001年	油彩、カンヴァス	199.0x188.0
12	松尾 藤代	TOTAL LOSS ROOM	2001年	油彩、カンヴァス	180.0x240.0

村上友晴（1938- ）

村上友晴の《無題》を初めて目にした方は、何も描かれていないように見える黒い絵画を前にして、戸惑いを覚えるかもしれません。現代美術の世界では、1960年代を中心に、このように単色の色の面だけから構成される極めてシンプルな抽象絵画、いわゆるモノクローム絵画（単色絵画）が描かれた時期がありました。村上もすでに60年代から、木炭粉を混ぜた黒色の油絵具を、ナイフでごく少量ずつキャンヴァスに塗り重ねていく独自の単色絵画を制作していました。

村上の絵画、というよりその制作態度が大きく変わるののは、彼が北海道のトラピスト修道院である修道士と出会い、1979年、洗礼を受けた頃からです。ルオーと同じくカトリック教徒となった村上の黒の画面は、洗礼後、宗教的意味合いを強く帯びるようになり、作品の題名も聖書から取られることが

多くなりました。キャンヴァスにひたすら絵具を置き続け、膨大な時間をかけておそろしく繊細な表面を作りあげていく単調な作業は、もはや何かを表現することよりも、「神への祈り」に近い行為へと変質します。それは瞑想的な黒い絵画だけでなく、《ピエタ》のような白いドローイングでも同じです。白い絵具で描かれた長方形の上に、硬質の鉛筆で無数の細かい線を引きながら、少しずつ絵具を削り落としていくことで作られるこの作品からも、画家の信仰の誠実さが感じられないでしょうか。朝教会に行き祈りを捧げ、1日制作に没頭し、夕方の祈りのあとに就寝するという修道士のような生活。そのなかで生まれる村上の絵画の黒い表面は、漆黒の深い闇でありながら、光を発しているようにさえ感じられます。その極めて繊細な表面の美しさを、じっくりとご覧ください。

宮島達男（1957- ）

宮島達男は、絵画にこだわり続ける他の2作家とは異なり、時計や電光表示に使われるデジタルカウンターを使って作品をつくります。今回展示される《地の天》も、既成品の青色LEDカウンターを展示室の床にちりばめ、星空に見立てた作品です。直径10メートルにも及ぶこの大作を前に、観客は作品と向き合って鑑賞するというよりは、作品が置かれた空間に入り込みそれを体験するかたちとなります。現代美術の世界では、1960年代頃から、このように空間に物を置き、空間全体を作品として体験させる表現手法が盛んになっていきますが、これをインスタレーションと呼びます。

星々に見立てられた無数のデジタルカウンターは、それぞれ異なるスピードで、1から9までひとつずつ数字をカウントしていきます。0は表示されることなく消えてしまいます

が、しばらくすると1が点灯し、再び数を重ねていきます。ひとつのカウンターが星の一生を表し、一度消滅した星も、必ず新しい命として再生するのです。《地の天》では星々に見立てられたデジタルカウンターは、多くの宮島作品では、人間の生と死、輪廻を表現するものとして登場します。仏教思想や東洋哲学から影響を受けたと自ら語るように、東洋的な生命の営みを、このように極めて現代的な技術を用いて具現化しているのです。

宮島は、1996年より、長崎の原爆で焼かれながら、奇跡的に蘇生した柿の木から生まれた苗木を、世界中の様々な場所に植樹する活動《柿の木プロジェクト》を行ってきました。このプロジェクトをはじめ、彼は「平和への祈り」を込めた作品を現在まで数多く制作しています。

松尾藤代（1968- ）

松尾藤代は、村上友晴と同じく、絵画によって静寂で崇高な世界をつくりあげます。一連の《Total Loss Room》は、窓から入る光のきらめきを描いた、なめらかで繊細な表面をもつ作品です。近現代絵画では、絵具やキャンヴァスの物質感、いわゆるマティエールやテクスチャーが強調される場合が多いのですが、松尾は近代以前の絵画のように、画材の物質感をあえて消し去ることで、光の表象に見る人の意識を集中させます。実際、部屋の内部など細部は全く描かれておらず、具象

と抽象の境界で、純粋な光の拡がりだけが追求されています。なかでも十字の窓枠を通して光が入り込む2点の絵画は、明らかに十字架を想起させます。古来、光は聖性のシンボルであり、ゴシック教会はステンドグラスを通して堂内に光を満たしました。また現代建築家の安藤忠雄は、「光の教会」において、祭壇後の壁に十字形のスリット窓をつくり、光の十字架を現出させました。松尾の絵画もこれに通じる、現代的な聖性のかたちと言えるでしょう。